中国人口の将来推計—1982~2002年—

石　　南　國

1.　中国の人口増加と動態動向

中国の人口については，1982年に3回目の人口調査が実施され，詳細な結果が公表されるようになって，その全貌がかなりはっきりとなってきた。これを機会に過去にさかのぼって人口数および動態統計の見直しと整備にも力を入れ，その精度と信頼性を高めるための統計数字の編成がえを行なうだけでなく，以前のような社会主義圏特有の秘密性および閉鎖性からの脱皮を図るなど，政府の姿勢も経済などの自由化を認めながら，世界に門戸を開くようになり，資本主義圏でみられる開放性にかなり近いものが中国においてもみられるようになってきた。

当然のことながらこの調査には大型電子計算機の導入などで近代的装置が万全に備えられ，実施以前からその成果が大きく期待されていた。この期待は裏切られることなく，1983年10月にはやくも人口調査10%抽出資料〔7〕が刊行物の形で公表された。最終確定数も大きく遅れずに，1985年3月に『中国1982年人口普査資料』〔8〕として公刊された。前者によると，総人口は10億379万450人と推定され，後者によると，10億3,188万7,961人（1,031,882,511〔(8)548頁〕）となっている。その差わずか約2.8%の誤差にすぎない。現役軍人を含めて国内人口は10億817万5,288人である。いずれにしても中国の人口は1982年の時点で10億の巨大人口になってきたことは確かである。1964年に実施された第2回人口調査では総数は7億2,307万269人あって，国内人口は現役軍人を含めて6億9,458万1,759人であったから18年間に3億1,359万3,529人，45.1%増加し，年平均1,742万1,863人，年平均増加率2.1%で増加したことになる〔(8)549頁〕。

第2次世界大戦前の中国では，大凡の人口として一般に4億から4億5,000万人の推計値が見込まれていた。しかしその実態は明らかでなかった。戦後中国に新政府が樹立された1949年には，その年末人口として5億5,000万人弱が把握されていたようであるが，これに対しては旧時代と変わりなくその余裕さえなかったのか，あるいはその規模の大きさの重大さにも気がつかなかったのか，人口に関してはマルクス的教えを解釈し，楽観しており〔(10)295ページ〕，中国新政府の対策は何ら講じられないままであった。その後社会主義建設がようやく軌道に乗るようになった1953年にいたって，新政府は史上はじめての近代的人口調査を中国全土に実施するのである。それは画期的

なことであり，その結果が公表されたときは世界の驚きと関心はかなりのものであった。台湾などを含めて中国の人口は6億193万8,035人（国内人口は 567,446,758 人〔(8)539頁，(6)191頁〕）の大台に昇っていたのが明らかとなったのである。

これは，1949年から1985年までの年次別推計総人口と人口動態を示した第1表からみれるように，1949年以降しばらく36から37‰の水準に出生率があり，20から14‰の水準に死亡率があり，そして16から23‰の高い水準に自然増加率が上昇し，1953年までの年間に年平均2％の自然増加率で増大した結果であった。この表には後に推計・公表された合計特殊出生率（ＴＦＲ）が示されている。1人の女子が生涯に産む子供数の平均数を示すものであるが，これが1949年には6.14の高水準に達し，翌1950年には8.81の水準へとさらに大きく更新している。1951年には5.70に低下しているが，翌1952年にふたたび増大しこの数値は6.47に達している。さすがの中国政府も，前回と違い，事の重大さに気づき，これに対する政策態度を人口抑制の方向ではっきりと示すようになった。つまり受胎調節を実施し，堕胎に対する緩和を図る一方，はやくも1954年9月には堕胎を医学的な理由から合法化する法的処置をとったのである。このようにして東欧社会主義圏にさき立つ3年前に堕胎合法化政策を採り，中国史上はじめての産児調節（節育運動）を導入するのである。いわゆる第1次人口抑制期のスタートである。

総人口をみると，さきにみたように戦前の大きく見積った4億5,000万人から1949年には5億5,000万人に達し，それ以後1,000万以上の人口を毎年追加しながら増加しているのをみることができる。この追加年増分の規模は1国の増分としては世界に類例をみないものであることはいうまでもない。この増分はそれ以後も勢いを増しながら総人口を雪だるま式に増大させている。第1回人口調査の行なわれた1953年の国内人口は5億8,796万人の巨大人口体になっているのをみることができる。1949年の規模を4,629万も上回っている。しかもこの増勢は衰えず1953—54年間に1,470万人を追加し，国内だけでも6億の人口規模に達するという事態をもたらした。

ここでうちだした1954年の堕胎合法化政策を含む中国初の計画出産の導入によってはやくも人口抑制策の効果の兆しがあらわれはじめた。1954—55年間には追加増分が前年の1,470万を下回って1,199万の水準にとどまり若干の逓減傾向をみせている。1954年の出生率は37.97‰に上昇し死亡率は前年を下回る13.18‰に低下している。自然増加率は24.79‰を示し，ＴＦＲは前年を上回る6.28となっていた。翌1955年には動態率の改善が認められる。この傾向は1956年までつづく。避妊のキャンペーンも行なわれ，人口抑制はあたかも軌道に乗るかのようにみえた。そしてこの抑制策はそれ以後も一層強化されたが，しかしこの増勢は一向に衰えをみせず，1956—57年間にはこれまでの増分を大きく上回り，1,825万の水準に達した。1957年で出生率は34.03‰に反転し，死亡率は改善されて10.80‰に低下している。このため自然増加率は大きく伸び23.23‰になり，ＴＦＲも6.41の水準に逆転上昇する結果となった。

第1表　中国の年次別総人口と動態統計　（単位：1,000人，‰，人）

年　次	総人口	出生率	死亡率	自然増加率	純増加	TFR
1949	541,670	36.00	20.00	16.00	—	6.14
1950	551,960	37.00	18.00	19.00	10,290	8.81
1951	563,000	37.80	17.80	20.00	11,040	5.70
1952	574,820	37.00	17.00	20.00	11,820	6.47
1953	587,960	37.00	14.00	23.00	13,140	6.25
1954	602,660	37.97	13.18	24.79	14,700	6.28
1955	614,650	32.60	12.28	20.32	11,990	6.26
1956	628,280	31.90	11.40	20.50	13,630	5.85
1957	646,530	34.03	10.80	23.23	18,250	6.41
1958	659,940	29.22	11.98	17.24	13,410	5.68
1959	672,070	24.78	14.59	10.19	12,130	4.31
1960	662,070	20.86	25.43	−4.57	10,000	4.02
1961	658,590	18.02	14.24	3.78	−3,480	3.29
1962	672,950	37.01	10.02	26.99	14,360	6.02
1963	691,720	43.37	10.04	33.33	18,770	7.50
1964	704,990	39.14	11.50	27.64	13,270	6.18
1965	725,380	37.88	9.50	28.38	20,390	6.08
1966	745,420	35.05	8.83	26.22	20,040	6.26
1967	763,680	33.96	8.43	25.53	18,260	5.31
1968	785,340	35.59	8.21	27.38	21,660	6.45
1969	806,710	34.11	8.03	26.08	21,370	5.72
1970	829,920	33.43	7.60	25.83	23,210	5.81
1971	852,290	30.65	7.32	23.33	22,370	5.44
1972	871,770	29.77	7.61	22.16	19,480	4.98
1973	892,110	27.93	7.04	20.89	20,340	4.54
1974	908,590	24.82	7.34	17.48	16,480	4.17
1975	924,200	23.01	7.32	15.69	15,610	3.57
1976	937,170	19.91	7.25	12.66	12,970	3.24
1977	949,740	18.93	6.87	12.06	12,570	2.84
1978	962,590	18.25	6.25	12.00	12,850	2.72
1979	975,420	17.82	6.21	11.61	12,830	2.75
1980	987,050	18.21	6.34	11.87	11,630	2.24
1981	1,000,720	20.91	6.36	14.55	13,670	2.63
1982	1,015,410	21.09	6.60	14.49	14,690	2.50
1983	1,024,950	18.62	7.08	11.54	9,540	2.03
1984	1,034,750	17.50	6.69	10.81	9,800	2.30
1985	1,046,390	17.80	6.57	11.23	11,640	

（注）TFR（Total Fertility Rate）は合計特殊出生率である。
（出所）〔(9)pp. 57—68，(12)128頁，(5)81頁，(6)185頁〕

このような状況のもとで中国は，1958年夏からはじまった「大躍進」の政策とともに人口政策においてこれまでの産児調節策を中止し，増加策へと方向転換するのである。しかしこの増加策は，まもなく1959年から1961年までの３年つづきの農作物不作を経て1962年に入り，ふたたび人口抑制策へと転ずる。この間の純増加は逓減し，抑制策の効果のあらわれのようにみえる。しかし1960—61年間における348万の純増加のマイナス値は，これを何か別の要因に由来しているとみなければならないであろう。動態率では，出生率のかなりの低下はみられたが，死亡率の改善はみられないばかりか，1960年の死亡率はこれまでにない高水準，25.43‰に増大しているのをみることができる。何か不自然な要因が深くかかわっていたとしか思えないのである。考えられることは「大躍進」政策で政治的に巻き込まれたり，農作物不作でその影響を受けりしたものがかなりいたとしか思えないのである。自然増加率のマイナス値，－4.57‰はこのようなことから説明できるのである。一方合計特殊出生率（ＴＦＲ）は4.02の水準に低下した。これは10年前の同数値，8.81の50％以上の減少である。政情が一段落したのか，1961年では死亡秩序が正常に戻ってきた。しかし食糧不足が解消されないなかで，出生率の低下傾向はつづき，自然増加率は3.78‰という低い水準にとどまるようになった。そしてＴＦＲはさらに低下して3.29の水準になった。

「大躍進」政策が結果的には失敗に終わり，大混乱を引き起こすのみとなり，これに３年つづきの農作物不作による食糧事情のひっ迫が重なり，中国にかなりの深刻な飢きんなどの事態を引き起こしたことは間違いない事実であろう。このような事情から政府の政策が必然的に人口抑制の必要を考え，家族計画（計画産児）を中心とした晩婚奨励策を採り入れる方向に行ったことは容易に理解できるところである。このときがいわゆる第２次人口抑制期のはじまりである。

まず早婚の弊害を解き，リングなどの器具をとりいれた家族計画の積極的な方策が採られたが，1962—63年間の純増加は1,877万人に増大し，その効果はほとんど上がらなかった。1962年の出生率は1953年以前の水準に戻り，37.01‰に上昇し，死亡率は以前からの改善傾向をたどり10.02‰に低下しているために自然増加率は26.99‰というこれまでの記録を大幅に更新し，ＴＦＲも一挙に前年の倍の水準，6.02に増大している。1963年になってこの増勢ははずみをつけてさらに進行し，出生率は43.37‰の1949年以来最高の水準に達し，そして自然増加率もこれまでの最高水準，33.33‰の数値を示した。ＴＦＲも1950年の8.81に次ぐ7.50の数値を示した。

こういう状況のもとで中国は1964年を期して第２回人口調査を実施した。この調査結果は，最近になって第３回人口調査の公刊誌に同時に掲載されるようになり，全貌が一層明らかにされてきた。第１表ではこのときの人口が７億を越える数字になっているが，『中国1982年人口普査資料』〔８〕によると，台湾および海外同胞を含めて７億2,307万人を数え，国内人口は現役軍人を含めて６億9,458万に昇っている。この調査年次にはこれまでにない規模の2,000万の純増加がみられる。この1962年にはじまった抑制策は1966年夏以降の文化革命の激化とともに中断を余儀なくされた。

そのために純増加分は2,000万を越える水準までに達した。出生率は1964年をピークにその後低下傾向をたどるが，その度合は小さくその水準は39.14‰から34.11‰の間にあり，死亡率は1965年に10‰を下回る9.50‰に低下した後も徐々に低下して1969年には8.03‰の水準に達している。そのために自然増加率はこの年間に徐々に低下傾向をみせるものの28.38‰から25.53‰の高水準を保ち，ＴＦＲは6.26から5.31の間の水準を維持している。しかし文化革命を終えた1969年夏ごろからふたたび出産抑制策が復活するのである。つまり第3次人口抑制期への転換である。

この転換は，その後社会主義建設路線に沿うものとして受けとめられ，さらに人口増加を強く緩める政策にその方向が定められるようになる。1969年に8億の大台を越えると同時にこの1年間に実に2,321万というこれまでの記録をさらに更新している。翌1970—71年間と1971—72年間には2,237万，1,948万と若干減少傾向を示したが，1972—73年間にふたたび増大し2,000万台に戻っている。しかし1973—74年間には大きく減じて1,648万の純増加を逓減している。この年間に動態率は着実に逓減傾向を示している。自然増加率は1974年に20‰の水準を下回り17.48‰を示し，ＴＦＲも1969年の5.72から低下し，1972年には5の水準を下回る4.98となり，そして1974年には4.17に低下する。

この傾向にもかかわらず，この1974年には中国人口は9億台に到達するのである。この年はちょうど＜世界人口年＞に当たり，各国が地球的視野で世界の人口問題を討議しようとしていたときであった。中国もこの気運に乗りブカレストで開催された国連主催の世界人口会議に参加し，世界の足並みに合わせようとする意欲がみられた。1976年になって周恩来，毛沢東の死亡につづいて，王・張・江・姚の4人組の追放，そして1977年の人口理論の自由討議や普及・出版とともに自由化路線が明らかになると，わけても当面の急激な人口増加に対してはかなりの関心が政府要人・学者らから寄せられた。このようにして1978年以降中国政府にとって人口抑制策こそが至上の急務であると考えるようになる。3年以内に人口増加率を年に1％以下に下げるために，国家は計画出産を提唱し，これを推進すべきことを1978年3月5日に採択された新憲法に記載し，その実施に当っては1980年9月の全人代会議において1夫婦に子供は1人が普遍的にもっとも好ましいと提唱することにより，いわゆる1人っ子政策を採用し，そして新婚姻法で結婚年齢の引き上げを決め，今世記末には中国の人口を12億に抑えることを目標としたのである。1982年の第3回目の人口調査はこういう厳密な1人っ子政策のもとで実施されたのである。この1人っ子政策は，しかしその後いろいろと揺れ動き，その可能にして有効な方策を模索するという状態に追い込まれたようである。1984年になって北京市でこの政策の緩和処置が採られるようになってからは，これ以降全国の各都市にこの風潮が波及するようになる。しかしこの効果は1974年以降着実にあらわれ，1980—82年間に純増加が若干増大傾向をみせたが，1982—83年間には大きく逓減し，はじめて1,000万を下回る954万人の純増加となった。出生率は1981年にそれまでの低下傾向から反転し20.91‰の水準に上昇し，翌

1982年にはこの傾向をたどり21.09‰に達している。死亡率は6.36‰から6.60‰にわずかに逓増し，したがって自然増加率は1980年の11.87‰水準を上回り14.55‰に上昇している。ＴＦＲも2.63—2.50の水準に上昇している。総人口は10億の大台に1981年に到達し，第3回人口調査の1982年には10億154万に増大している。1人っ子政策の効果はともかく，1982—83年間の1,000万以下の純増加とＴＦＲの2.50から2.03への逓減が強力な人口抑制策に起因するものであることは確かであろう。

2.　中国人口の構造変動

1）男女別構造の変動

戦前の中国は，長期の戦乱のなかで多くの男子人口が喪失し，また後に華僑社会を形成する結果となったが，多くの男子が国外へ流出して行ったこともあって，女子人口の超過が予想されるが，伝統的な嬰児殺し，とくに女児の殺害あるいは遺棄の因習などの慣行で，この予想は裏切られている。1949年の性比は，108.2〔(4)6頁〕の高水準であった。この数値の真偽のほどは明らかでないが，これは男子の喪失を相殺して余りがあるほど女子人口が生残していないことを示すものである。

第2表　中国人口の年齢階級別性比

年齢階級別	1953年	1964年	1982年
総　数	105.99	105.46	105.45
0　歳	104.88	103.83	107.63
0—4	106.80	105.71	107.14
5—9	112.72	109.78	106.18
10—14	117.71	108.85	106.04
15—16	109.81	108.73	103.64
20—24	104.92	108.81	103.83
25—29	105.37	113.57	106.53
30—34	105.97	112.43	108.29
35—39	107.35	110.28	111.34
40—44	108.25	107.16	114.23
45—49	104.21	103.75	112.28
50—54	104.31	100.60	111.63
55—59	102.33	99.35	106.67
60—64	94.26	85.12	100.41
65—69	84.72	78.29	91.74
70—74	73.39	68.61	81.32
75—79	61.53	57.89	68.29
80—84	49.52	47.26	57.39
85—89	39.80	38.42	46.14
90—94	34.30	36.64	37.60
95—99	35.26	50.66	43.68
100歳以上	88.63	77.15	41.79
年齢不詳		100.61	89.43

（注）女子100人に対する男子の数。
（資料）〔(8)539—41頁および545—47頁〕

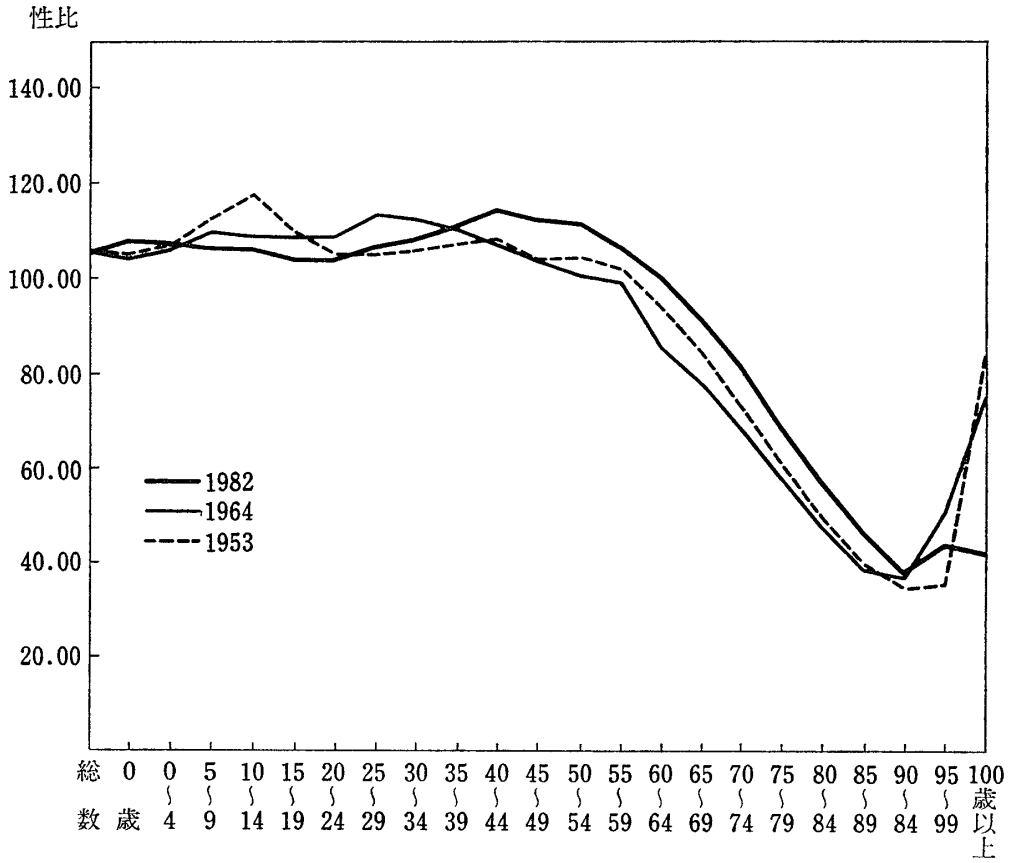
この傾向は，しかし第1回人口調査時の1953年には，かなり正常に戻ってきたようである。第2表は過去3回の人口調査結果に基づく年齢階級別性比を示し，その変動を読みとることのできるものである。この表にみられるように，総数の性比は1953年に105.99の水準に大きく低下し，その後の第2回目の人口調査時の1964年には105.46とわずかに逓減している。そして第3回人口調査時の1982年にも0.01の微減しかなく，105.45の水準でほとんど変わりがない。まず出生性比が1953年に104.88を示しているが，これは通例の105の水準に近いものである。その後1964年に103.83に低下し，そして1982年には反転して107.63の高水準に上昇している。この反転は1人っ子政策の影響に

よるものとも考えられるが明らかでない。

つぎに，年齢階級別にみると，第1図からまず1953年において15—40歳の青壮年層に，1964年において15—24歳の青年層に，そして1982年において10—24歳の青少年層に性比水準が目だって低くなっているのに気づく。これは，男子の数が通常の場合より低く計上されたものであり，事実中国人民開放軍と現役軍人を除外したものであることが1982年については公表データによって明らかにされた〔(8)557頁，(6)194頁〕。したがって15—24歳の欠損は軍人を除外したことによるものといってよい。しかし10—14歳階級の欠損については明らかでない。1982年人口調査資料によれば，軍人の総数423万8,210人のうち，男子が412万9,390人，97.4%を占め，女子が10万8,820人，2.6%を占め，ほとんど男子である〔(6)194頁〕。1953年については680万人〔(1)〕pp.78—9〕の軍人がこの図で除かれているとされている。1964年については336万1,655人（現役軍人を含む国内人口6億9,458万1,759人—省市自治区人口6億9,122万104人）〔(8)16頁〕の軍人がこの図示された曲線に含められているということであるが，なお10—24歳の年齢階級に男子の欠損が認められる。

さらに顕著な点は，20—24歳階級を境いとしてこの年齢階級以下では1982年の性比が1953年のそれを下回って低下し，この年齢階級以上では100歳以上を除き逆転して1982年の性比が1953年のそ

第1図　中国人口の年齢階級別性比の変動



（資料）第2表と同じ。

れを上回って上昇していることであろう。これに加えて1982年と1964年とでこのような傾向の逆転階級が35—39歳階級となっており，そしてこの階級以後の年齢において1964年の性比水準が1953年の性比水準以下に低下しているが，これは1964年の性比に上述のように軍人が含まれたことによると思われる。これを考慮に入れてもなおこれら3時点におけるの性比水準の変動傾向は不自然を免がれないようである。1964年の性比が軍人の年齢層を越えてもなお1953年水準を大きく下回り低水準を示しているが，1982年の性比は1953年の水準を大きく上回っているのである。この年間で男女の死亡秩序に35—39歳以上の年齢階級において大きな変動があったことを示唆するものとして重要である。

2）男女・年齢別構造の変動

新政府樹立当時は，いわゆる典型的な＜富士山型＞人口ピラミッドを形成し，第1表でみたように，高出生率・高死亡率のパターンから死亡率がやや低下しはじめ，人口増加率の激増がみられた。そして第2図から男女とも10歳前後と17—8歳において第2次大戦の傷跡と思われる欠損をみることができる。とくに女子の傷跡は深い。このパターンは第1回人口調査のあった1953年でひとつのピークに達し，＜1953年人口ピラミット＞が形成される。

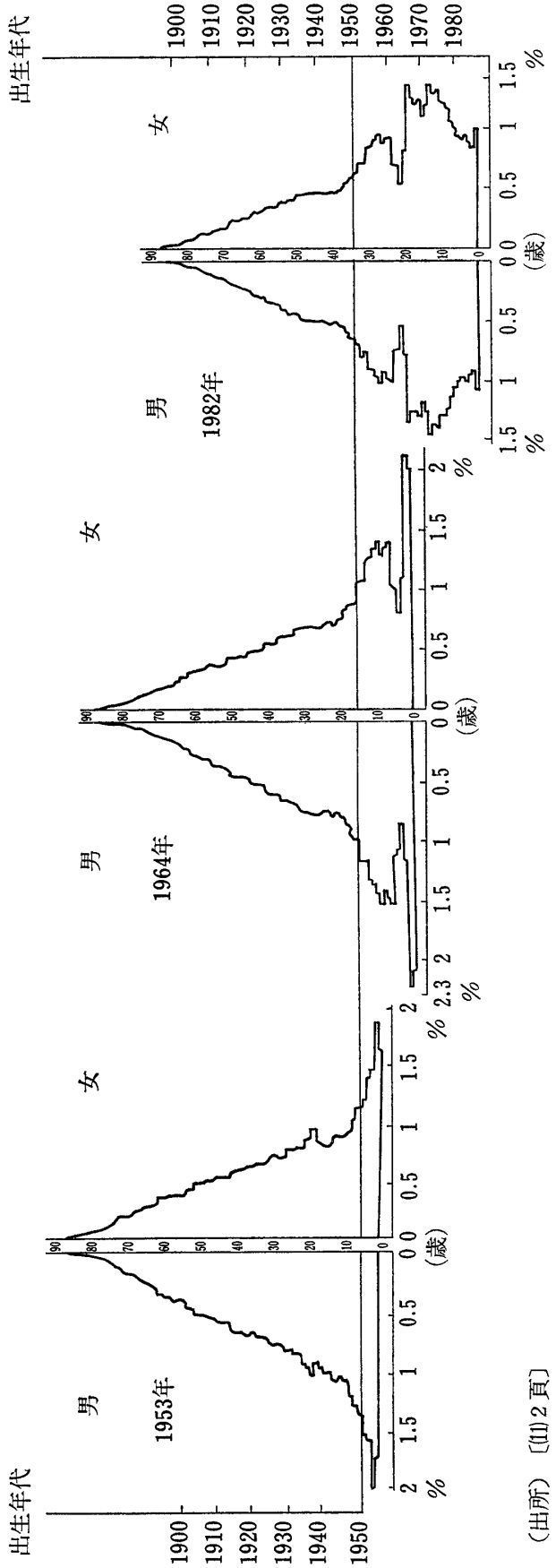
第1次人口抑制期に入った1954年ごろから，人口ピラミッドは低出生率・低死亡率のパターンをとる＜つりがね型＞に転じ，1960年ごろまでこの状態はつづく。大躍進の混乱と農作物不作による食糧不足がきっかけとなった第2次人口抑制期に入って男女とも内側に切り込みをうけ，1961年にはその極に達する。この極は抑制効果というよりは飢きんによるものであった。その証拠は，すでにみてきたように，1962—63年の純増加が1,877万人に達していたことで足りるであろう。出生率は1964年にピークに達し，人口ピラミッドの裾野は大きく広がり，＜1964年人口ピラミッド＞は＜つりがね型＞からふたたび＜富士山型＞に反転する形をとるのである。

1966年の文化革命で抑制策が，一時中断されたために人口ピラミッドは狭まりかけていたのをさらに広げはじめた。そして文化革命の終息とともにはじまった第3次人口抑制策期の転換によって純増加の低下（1971—72年）と増加（1972—73年）とを繰り返しながら，1973—74年には抑制策の効果が大きくあらわれるようになる。＜1974年人口ピラミッド＞は1964年以後緩慢に縮めていた裾野を次第に強く縮めながら，＜つりがね型＞から出生率がさらに低下する＜つぼ型＞へと発展するのである。

3）労働力人口の構造変動

労働力人口は，総人口の一定割合を占め，総人口の動きと密接に関連しながら構造変動することが通常である。中国においてもこのことは同じである。第3表は戦後の人口調査に基づく労働力人

第2図　中国の男女・年齢別人口構造の変化



（出所）〔(11) 2 頁〕

第3表　中国の男女・年齢階級別労働力人口の構造変動

(1) 年次	(2) 総数	(3) 0—14歳	(4) 15—64歳	(5) 65歳以上	(6) (3)＋(5)
	実		数		
1983年					
総数	567,446,758	205,840,897	336,567,604	25,038,257	230,879,144
男子	291,969,807	108,452,318	172,846,941	10,670,548	119,122,875
女子	275,476,951	97,388,579	163,720,663	14,367,709	111,756,288
1964年					
総数	694,581,759	282,655,814	387,169,004	24,756,941	307,412,755
男子	356,517,011	146,745,892	199,628,176	10,142,943	156,888,835
女子	338,064,748	135,909,922	187,540,828	14,613,998	150,523,920
1982年					
総数	1,003,913,927	337,251,448	617,386,892	49,275,587	386,527,035
男子	515,277,505	173,848,163	319,560,094	21,869,248	195,717,411
女子	488,636,422	163,403,285	297,826,798	27,406,339	190,809,624

(7) 年次	(8) 総数	(9) 0—14歳	(10) 15—64歳	(11) 65歳以上	(12) (5)/(4)	(13) (3)/(4)	(14) [(3)÷(5)]/(4)	(15) (5)/(3)
	比				率			
1953年								
総数	100.00	36.28	59.31	4.41	7.43	61.16	68.60	12.16
男子	100.00	37.15	59.20	3.65	6.17	62.27	68.92	9.84
女子	100.00	35.35	59.43	5.22	8.78	59.48	68.26	14.75
1964年								
総数	100.00	40.70	55.74	3.56	6.39	73.01	79.40	8.76
男子	100.00	41.16	55.99	2.85	5.08	73.51	78.59	6.91
女子	100.00	40.20	55.48	4.32	7.79	72.47	80.26	10.75
1982年								
総数	100.00	33.59	61.50	4.91	7.98	54.63	62.61	14.61
男子	100.00	33.74	62.02	4.42	6.84	54.40	61.25	12.58
女子	100.00	33.44	60.95	5.61	9.20	54.87	64.07	16.77

（注）1964年および1982年の数字は年齢不詳を年齢階級別比例配分で含めたものである。

口の構造変動を示したものである。さきのピラミッドによる人口構造の変動にみられるように，第2回人口調査時前後の出生率上昇による0—14歳階級の若年人口の急増の影響を受けて，1964年の労働力人口は，その絶対数において1954年のそれを5,000万大きく上回っているものの，その労働力率は1954年の59.31%を下回る55.74%に低下している。これに反し若年人口は36.28%から40.70%の総人口に対する比率に増大し，1953年の2億584万を7,681万も大きく上回る2億8,266万弱に達している。男子の総人口に対する比率が大きく41.16%に上昇したことにより，男子の65歳以上の老年人口においてはその比率はかなり低い，2.85%の水準に低下しているのをみることができる。

1982年においてはこれまでの傾向とは逆に若年人口の総人口にたいする割合が大きく低下し，総人口に対する労働力人口の割合が61.50%の水準に上昇している。そして老年人口の総人口に対する割合は，とくに女子において大きく伸び，5.61%の水準に達している。これは，1955年当時の日本人口の構造係数に近いものであり，中国人口の構造が第3次人口抑制期を迎えて急激な変動を引き起こし，労働力人口の構造に大きく影響を与えていることによるものである。

生産年齢人口に対する非生産年齢人口の割合，いわゆる従属負担係数は，このため大きく変わってきているのをみることができる。第3表の⑿，⒀および⒁欄はこれを示す代表的な指標である。⑿欄によると，労働力人口に対する老年人口の割合は1982年に7.98%に達し，女子のそれは9.20%に達している。1964年の水準をかなり上回っている。⒂欄の若年人口に対する老年人口の割合の上昇と符合し，中国においても老年化の兆しが出てきたことを示すものである。⒀欄の指標，すなわち労働力人口に対する若年人口の割合は1964年の73.01%から大きく低下し，1982年には54.63%の水準に達している。そして生産年齢人口に対する非生産年齢人口の割合が62.61%水準に達しているのをみることができる。これは生産年齢人口100人で従属人口62.61人を経済負担しなければならないことを示すものであるが，1964年における79.40人の経済負担からかなり軽減された状態に入り，発展途上国の域を脱した観がある。

3.　中国人口の将来推計

以上の構造的特質をもつ中国人口は，今後どのような姿を呈するのであろうか。人口規模が大きいだけに世界人口に与える影響も大きい。最近の国家的政策の重要事項のなかに1人っ子政策を導入して世界の注目を集めていることは前述した文脈でみたとおりであるが，人類史上のひとつの実験場ともみられるこの中国人口の動きこそわれわれに大きな示唆を与えるであろうことは確かである。

筆者はかつて1953年の第1次人口調査結果を基に中国人口の将来推計を試み〔3〕，それまでの国連等の推計値との比較によって中国人口の基本構造の姿を捕え，このたびの1982年の第3次人口調査結果が公表されるまで，この推計結果にたよることが多かった。第3次人口調査結果を中心にかなり人口統計データが整備されたとはいえ，まだ明らかでない部分が多く，人口推計に当ってはやはり前回の方法にたよるよりほかないようである。

基本的にはこの人口調査結果による基本構造を基礎として将来の基本構造の推計を試みることにしたい。まず出生率は，第1表にかなり精度の高い数値が認められるので，これを基本に仮出生率を考えることとしたい。そして出生時の平均余命($\mathring{e}_0$)は，国家統計局によって1985年に男子が68.92歳，女子が70.98歳に達したことが明らかにされているので，これを基準にコール＝デミニの西モデル生命表〔2〕，Level 21 以上の生存率，P(x)を適用していきたい。

以上の仮定ならびに出生率および男女・年齢別生存率〔P(x)〕の水準の高低によって，高位，中位ならびに低位の3種の将来推計を1982年から2002年までの20年間にわたって5年ごとに試みることにしたい。

(1)高位推計では，まず第1表の出生率，21.09‰を勘案して，1982—87年間以降，同水準，21.10‰で持続してゆくものとする。第4表の高位推計の欄は，この仮定に基づく各年間の出生数推計の計算過程を示したものである。15—44歳の女子人口を年齢別に1，7，7，6，4，1のウエイトを乗ずることによってその調節女子人口（weighted sum of woman）を推計〔(3)80—1ページ〕し，そして生率の21.10‰を基準として5年間出生率をもとめると，105.50‰となる。これを第2表から勘案した107.14の性比を考慮して男子と女子に出生率を配分すると，それぞれ54.57‰，50.93‰となる。そしてこの5年間出生率を平均調節女子人口数，10億7,136万8,000人に乗ずると，この年間の出生数は1億1,302万9,000人，そして男女別にはそれぞれ5,846万4,000人，5,456万5,000人と推計される。同様にして1987—92年間以降について求めると，第4表の上欄のとおりである。

つぎに，男女・年齢別生存率〔P(x)〕は，後の中位推計および低位推計にも共通するが，コール=デミニの西モデル生命表から，1982—87年，1987—92年，1992—97年および1997—2002年の各年間の水準をそれぞれ Level 21, Level 22, Level 23 および Level 24 を適用する。これらの生命表は男女それぞれ66.023/70.000歳，68.556/72.500歳，71.188/75.000歳および73.899/77.500歳を表章している〔(2) pp. 22—5〕。高位推計は推計期間中高出生率を持続し，各年間における出生時の平均余命の伸長度の高い（死亡率の急速な低下）場合を想定するものであり，人口増加は急速であることが含意されている。

(2)中位推計では，出生率が，1人っ子政策の進行で漸次低下することを想定し，各5年間に10%ずつ低下してゆくものと仮定される。第4表に認められるように仮出生率は最初の年間で18.99‰，次いで17.09‰，15.38‰へそして最後の年間で13.84‰へと低下してゆくことになる。

男女・年齢別生存率〔P(x)〕は，上述のように高位推計の場合と同じである。中位推計でも平均余命（$\mathring{e}_0$）の伸長度は低く，死亡率の低下も高位水準と同じく進むものと考える。

(3)低位推計では，出生率の低下がなお急速に進み，最初の年間で17.94‰の水準に低下し，その後の年間ではそれぞれ15%ずつ低下してゆくものと仮定される。したがってこの推計では人口は中位推計よりも緩慢に増加してゆくものと想定される。

以上の仮定のもとに，中国の将来人口は，高位，中位および低位の3階段で推計される。第5表，第6表および第7表はその推計結果の人口基本構造である。第8表はその総人口の推計結果をまとめたものである。これによると，その人口規模は1982年の10億から2002年には12億ないし14億弱の大きさに達し，20年間に20%から30%の増加が見込まれる。第3図，第4図および第5図はこれら推計人口の基本構造をピラミッドの形で各年次について示したものである。第9表はこれらの

第4表　中国の出生数推計（1982—2002年）　（単位：1,000人，‰）

年齢階級	1982年	1987年	1992年	1997年	2002年	評量
高位						
評量可妊年齢女子人口数						
15—19歳	61,562	63,747	53,420	45,272	51,452	1
20—24	255,381	428,652	444,661	373,135	316,547	7
25—29	313,726	253,617	426,678	443,387	372,561	7
30—34	210,168	266,670	216,138	364,380	379,272	6
35—39	102,624	138,668	176,452	143,376	242,212	4
40—44	22,616	25,305	34,306	43,796	35,678	1
評量合計	966,077	1,176,659	1,351,655	1,413,340	1,397,722	
平均値	1,071,368	1,264,157	1,382,498		1,406,156	
仮出生率	21.10	21.10	21.10		21.10	
各5年間出生率	105.50	105.50	105.50		105.50	
男子	(性比) 54.57	(性比) 54.57	(性比) 54.45		(性比) 54.29	
女子	(107.14) 50.93	(107.14) 50.93	(106.64) 51.05		(106.00) 51.21	
各5年間出生数	113,029	133,369	145,854		148,283	
男子	58,464	68,985	75,277		76,306	
女子	54,565	64,384	70,577		71,977	
中位						
評量可妊年齢女子人口数						
15—19歳	61,562	637,473	53,420	45,272	47,174	1
20—24	255,381	428,652	444,661	373,135	316,547	7
25—29	313,726	253,617	426,678	443,387	372,561	7
30—34	210,168	266,670	216,138	364,380	379,272	6
35—39	102,624	138,668	176,452	143,376	242,212	4
40—44	22,616	25,305	34,306	43,790	35,678	1
評量合計	966,077	1,176,659	1,351,655	1,413,430	1,393,444	
平均値	1,071,368	1,264,157	1,382,498		1,403,437	
仮出生率	18.99	17.09	15.38		13.84	
各5年間出生率	94.95	85.45	76.90		69.20	
男子	(性比) 49.11	(性比) 44.20	(性比) 39.69		(性比) 35.61	
女子	(107.14) 45.84	(107.14) 41.25	(106.64) 37.21		(106.00) 33.59	
各5年間出生数	101,726	108,022	106,314		97,118	
男子	52,615	55,876	54,871		49,976	
女子	49,111	52,146	51,443		47,142	
低位						
評量可妊年齢女子人口数						
15—19歳	61,562	63,747	53,420	45,272	44,560	
20—24	255,381	428,652	444,661	373,135	316,547	
25—29	313,726	253,617	426,678	443,387	372,561	
30—34	210,168	266,670	216,138	364,380	379,272	
35—39	102,624	138,668	176,452	143,376	242,212	
40—44	22,616	25,305	34,306	43,790	35,678	
評量合計	966,077	1,176,659	1,351,655	1,413,430	1,390,830	
平均値	1,071,368	1,264,157	1,382,492		1,402,130	
仮出生率	17.94	15.25	12.96		11.02	
各5年間出生率	89.70	76.25	64.80		55.10	
男子	(性比) 46.40	(性比) 39.44	(性比) 33.44		(性比) 28.35	
女子	(107.14) 43.30	(106.64) 36.81	(106.64) 31.36		(106.00) 26.75	
各5年間出生数	96,102	96,392	89,586		77,257	
男子	49,712	49,858	46,231		39,750	
女子	46,390	46,534	43,355		37,507	

（資料）〔(2) pp. 22—25，(8)273—81頁〕

第5表　中国の男女・年齢階級別高位人口推計：1982～2002年

年齢階級別	1982年	1987年	1992年	1997年	2002年
総　数					
総　数	1,003,915	1,077,406	1,173,998	1,283,062	1,395,072
0—4歳	94,705	107,636	129,536	143,019	146,556
5—9	110,736	93,989	107,115	129,178	142,828
10—14	131,811	110,327	93,746	107,043	129,062
15—19	125,367	131,223	109,973	93,546	106,909
20—24	74,363	124,518	130,577	109,607	93,360
25—29	92,564	73,745	123,773	130,053	109,346
30—34	72,958	91,693	73,244	123,211	129,704
35—39	54,222	72,120	90,913	72,819	122,778
40—44	48,438	53,383	71,638	90,144	72,423
45—49	47,403	47,344	52,413	70,649	89,278
50—54	40,816	45,790	45,990	51,218	69,452
55—59	33,894	38,703	43,736	44,267	49,711
60—64	27,362	31,217	35,983	41,095	42,074
65—69	21,260	24,047	27,778	32,474	37,690
70—74	14,348	17,299	19,887	23,409	27,968
75—79	8,617	10,306	12,691	14,956	18,133
80＋	5,051	4,066	5,005	6,374	7,800
男　子					
総　数	515,278	553,483	602,724	658,007	714,565
0—4歳	48,984	55,883	66,720	73,575	75,248
5—9	57,026	48,562	55,566	66,496	73,451
10—14	67,838	56,781	48,410	55,554	66,416
15—19	63,805	67,476	56,553	48,274	55,457
20—24	37,880	63,282	67,054	56,302	48,139
25—29	47,746	37,514	62,819	66,712	56,123
30—34	37,930	47,248	37,221	62,481	66,492
35—39	28,566	37,453	46,800	36,975	62,225
40—44	25,828	28,078	37,332	46,354	36,745
45—49	25,073	25,171	27,500	36,745	45,842
50—54	21,529	24,093	24,341	26,770	36,012
55—59	17,494	20,226	22,817	23,253	25‘813
60—64	13,709	15,871	18,540	21,158	21,841
65—69	10,172	11,788	13,831	16,407	19,053
70—74	6,435	8,037	9,476	11,342	13,771
75—79	3,497	4,449	5,682	6,878	8,493
80＋	1,766	1,571	2,062	2,731	3,444
女　子					
総　数	488,637	523,923	571,724	625,055	680,507
0—4歳	45,721	51,753	62,816	69,444	71,308
5—9	53,710	45,427	51,549	62,682	69,377
10—14	63,973	53,546	45,336	51,489	62,646
15—19	61,562	63,747	53,420	45,272	51,452
20—24	36,483	61,236	63,523	53,305	45,221
25—29	44,818	36,231	60,954	63,341	53,223
30—34	35,028	44,445	36,023	60,730	63,212
35—39	25,656	34,667	44,113	35,844	60,553
40—44	22,610	25,305	34,306	43,790	35,678
45—49	22,330	22,173	24,913	33,904	43,436
50—54	19,287	21,697	21,649	24,448	33,440
55—59	16,400	18,477	20,919	21,014	23,898
60—64	13,653	15,346	17,443	19,937	20,233
65—69	11,088	12,259	13,947	16,067	18,637
70—74	7,913	9,262	10,411	12,067	14,197
75—79	5,120	5,857	7,009	8,078	9,640
80＋	3,285	2,495	2,943	3,643	4,356

（資料）〔(8)272—81頁〕および第4表より。

第6表　中国の男女・年齢階級別中位人口推計：1982—2002年

年齢階級別	1982年	1987年	1992年	1997年	2002年
総　数					
総　数	1,003,915	1,067,512	1,140,008	1,210,640	1,272,477
0—4歳	94,705	97,742	105,391	104,607	96,215
5—9	110,736	93,989	97,270	105,100	104,557
10—14	131,811	110,327	93,746	97,111	105,006
15—19	125,367	131,223	109,973	93,546	96,990
20—24	74,363	124,518	130,577	109,607	93,360
25—29	92,564	73,745	123,773	130,053	109,346
30—34	72,958	91,693	73,244	123,211	129,704
35—39	54,222	72,120	90,913	72,819	122,778
40—44	48,438	53,383	71,638	90,144	72,423
45—49	47,403	47,344	52,413	70,649	89,278
50—54	40,816	45,790	45,990	51,218	69,452
55—59	33,894	38,703	43,736	44,267	49,703
60—64	27,362	31,217	35,983	41,095	42,074
65—69	21,260	24,047	27,778	32,474	37,690
70—74	14,348	17,299	19,887	23,409	27,968
75—79	8,617	10,306	12,691	14,956	18,133
80＋	5,051	4,066	5,005	6,374	7,800
男　子					
総　数	515,278	547,892	584,960	620,607	651,486
0—4歳	48,984	50,292	54,515	53,990	49,511
5—9	57,026	48,562	50,007	54,332	53,899
10—14	67,838	56,781	48,410	49,903	54,267
15—19	63,805	67,476	56,553	48,274	49,816
20—24	37,880	63,282	67,054	56,302	48,139
25—29	47,746	37,514	62,819	66,712	56,123
30—34	37,930	47,248	37,221	62,481	66,492
35—39	28,566	37,453	46,800	36,975	62,225
40—44	25,828	28,078	37,332	46,354	36,745
45—49	25,073	25,171	27,500	36,745	45,842
50—54	21,529	24,093	24,341	26,770	36,012
55—59	17,494	20,226	22,817	23,253	25,813
60—64	13,709	15,871	18,540	21,158	21,841
65—69	10,172	11,788	13,831	16,407	19,053
70—74	6,435	8,037	9,476	11,342	13,771
75—79	3,497	4,449	5,682	6,878	8,493
80＋	1,766	1,571	2,062	2,731	3,444
女　子					
総　数	488,637	519,620	555,048	590,033	620,991
0—4歳	45,721	47,450	50,876	50,617	46,704
5—9	53,710	45,427	47,263	50,768	50,658
10—14	63,973	53,546	45,336	47,208	50,739
15—19	61,562	63,747	53,420	45,272	47,174
20—24	36,483	61,236	63,523	53,305	45,221
25—29	44,818	36,231	60,954	63,341	53,223
30—34	35,028	44,445	36,023	60,730	63,212
35—39	25,656	34,667	44,113	35,844	60,553
40—44	22,610	25,305	34,306	43,790	35,678
45—49	22,330	22,173	24,913	33,904	43,436
50—54	19,287	21,697	21,649	24,448	33,440
55—59	16,400	18,477	20,919	21,014	23,890
60—64	13,653	15,346	17,443	19,937	20,233
65—69	11,088	12,259	13,947	16,067	18,637
70—74	7,913	9,262	10,411	12,067	14,197
75—79	5,120	5,857	7,009	8,078	9,640
80＋	3,285	2,495	2,943	3,643	4,356

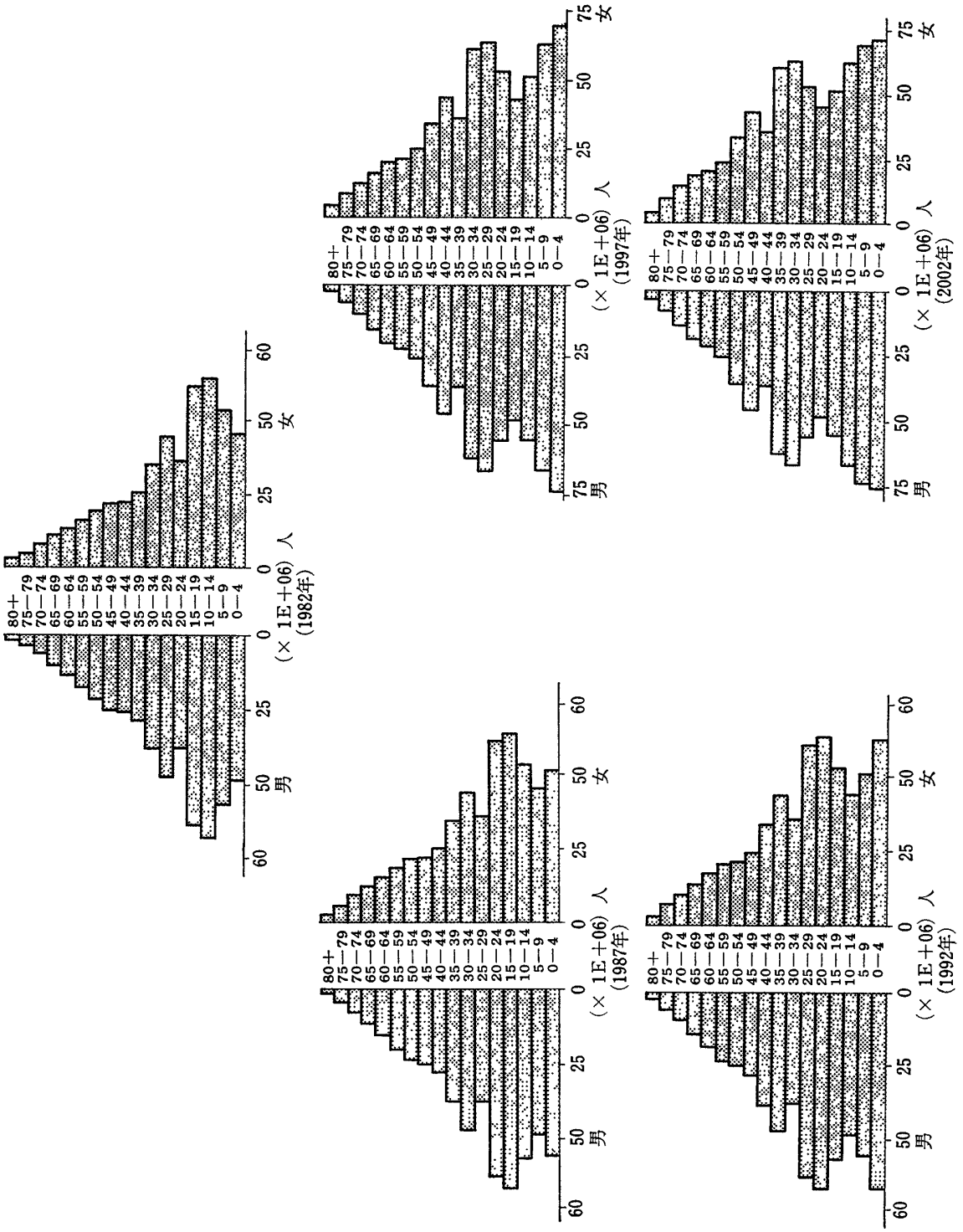
（資料）　第5表と同じ。

第7表　中国の男女・年齢階級別低位人口推計：1982—2002年

年齢階級別	1982年	1987年	1992年	1997年	2002年
総　　数					
総　　数	1,003,915	1,062,108	1,122,860	1,178,154	1,220,458
0－4歳	94,705	92,338	93,621	87,845	76,358
5－9	110,736	93,989	91,892	93,362	87,728
10—14	131,811	110,327	93,746	91,742	93,278
15—19	125,367	131,223	109,973	93,546	91,627
20—24	74,363	124,518	130,577	109,607	93,360
25—29	92,563	73,745	123,773	130,053	109,346
30—34	72,958	91,693	73,244	123,211	129,704
35—39	54,222	72,120	90,913	72,819	122,778
40—44	48,438	53,383	71,638	90,144	72,423
45—49	47,403	47,344	52,413	70,649	89,278
50—54	40,816	45,790	45,990	51,218	69,452
55—59	33,894	38,703	43,736	44,267	49,711
60—64	27,362	31,217	35,983	41,095	42,074
65—69	21,260	24,047	27,778	32,474	37,690
70—74	14,348	17,299	19,887	24,792	27,968
75—79	8,617	10,306	12,691	14,956	19,041
80＋	5,051	4,066	5,005	6,374	8,642
男　　子					
総　　数	415,277	545,117	575,907	604,160	624,279
0－4歳	48,984	47,517	48,221	45,186	39,200
5－9	57,026	48,562	47,248	48,059	45,110
10—14	67,838	56,781	48,410	47,150	48,001
15—16	63,805	67,476	56,553	48,274	47,067
20—24	37,880	63,282	67,054	56,302	48,139
25—29	47,745	37,514	62,819	66,712	56,123
30—34	37,930	47,248	37,221	62,481	66,492
35—39	28,566	37,453	46,800	36,975	62,225
40—44	25,828	28,078	37,332	46,354	36,745
45—49	25,073	25,171	27,500	36,745	45,842
50—54	21,529	24,093	24,341	26,770	36,012
55—59	17,494	20,226	22,817	23,253	25,813
60—64	13,709	15,871	18,540	21,158	21,841
65—69	10,172	11,788	13,831	16,407	19,053
70—74	6,435	8,037	9,476	12,725	13,771
75—79	3,497	4,449	5,682	6,878	9,401
80＋	1,766	1,571	2,062	2,731	3,444
女　　子					
総　　数	488,637	516,991	546,953	573,994	596,179
0－4歳	45,721	44,821	45,400	42,659	37,158
5－9	53,710	45,427	44,644	45,303	42,618
10—14	63,973	53,546	45,336	44,592	45,277
15—19	61,562	63,747	53,420	45,272	44,560
20—24	36,483	61,236	63,523	53,305	45,221
25—29	44,818	36,231	60,954	63,341	53,223
30—34	35,028	44,445	36,023	60,730	63,212
35—39	25,656	34,667	44,113	35,844	60,553
40—44	22,610	25,305	34,306	43,790	35,678
45—49	22,330	22,173	24,913	33,904	43,436
50—54	19,287	21,697	21,649	24,448	33,440
55—59	16,400	18,477	20,919	21,014	23,898
60—64	13,653	15,346	17,443	19,937	20,233
65—69	11,088	12,259	13,947	16,067	18,637
70—74	7,913	9,262	10,411	12,067	14,197
75—79	5,120	5,857	7,009	8,078	9,640
80＋	3,285	2,495	2,943	3,643	5,198

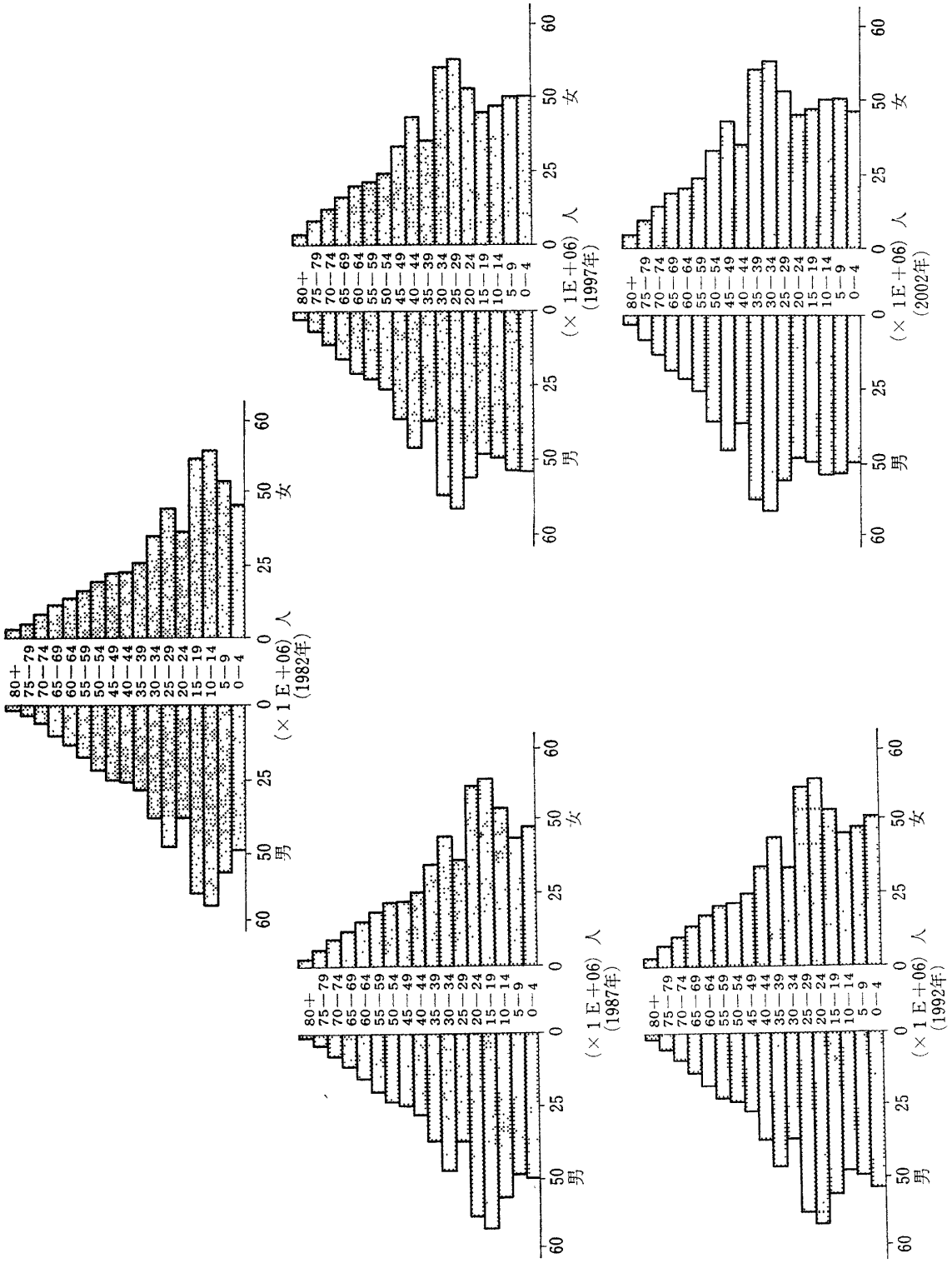
（資料）　第5表と同じ。

第３図　中国の男女・年齢階級別高位人口推計：1982—2002年



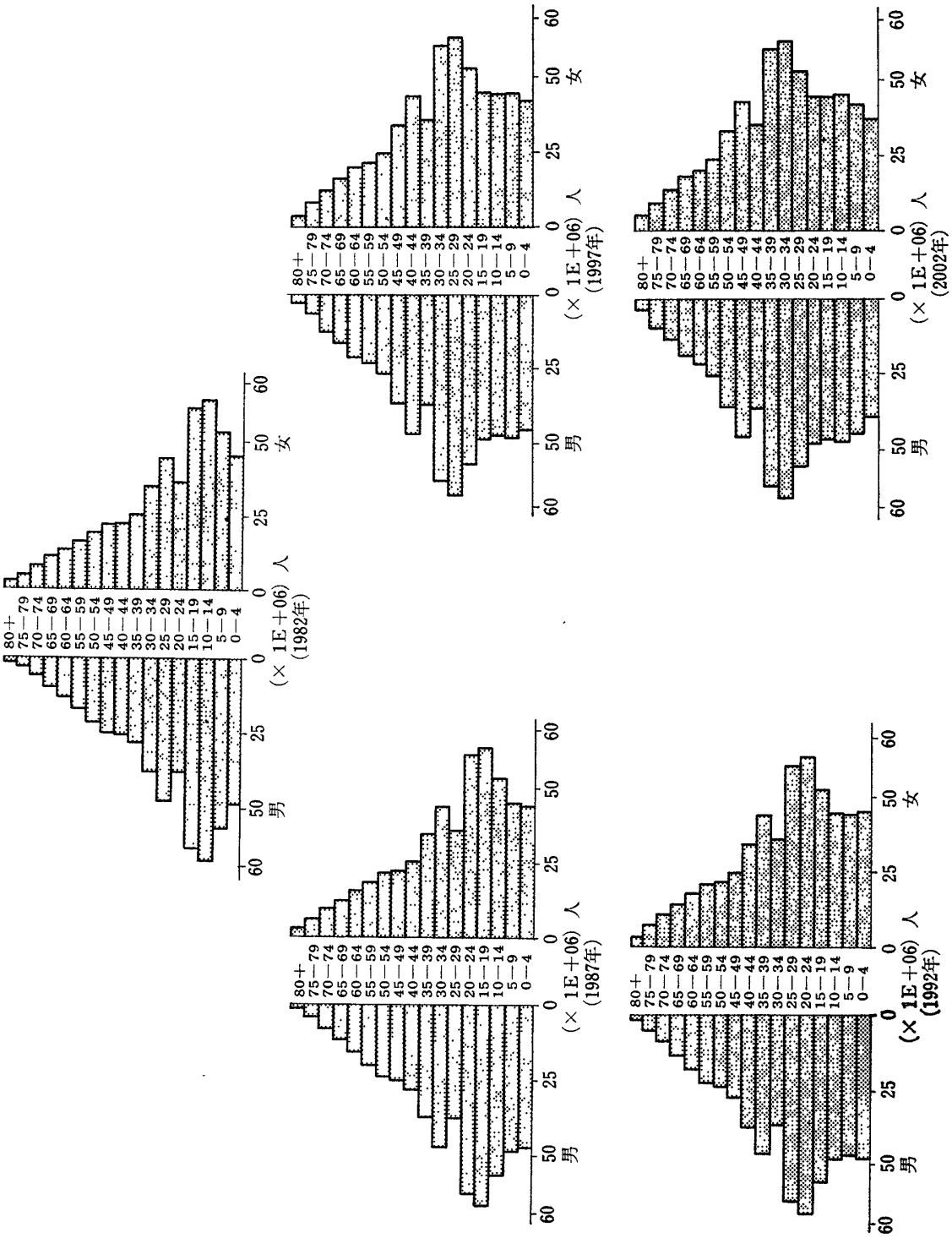
（資料）第５表より。

第４図　中国の男女・年齢階級別中位人口推計：1982—2002年



（資料）　第６表より。

第５図　中国の男女・年齢階級別低位人口推計：1982—2002年



（資料）第７表より。

第8表　中国人口の将来推計結果（1982—2002年）

（単位：1,000人）

年　次	総　数	男　子	女　子
高　位　推　計			
1982	1,003,915	515,287	488,637
1987	1,077,406	553,483	523,923
1992	1,173,998	602,724	571,274
1997	1,283,062	658,007	625,055
2002	1,395,072	714,565	680,507
中　位　推　計			
1982	1,003,914	515,278	488,637
1987	1,067,512	547,892	519,620
1992	1,140,008	584,960	555,048
1997	1,210,640	620,607	590,033
2002	1,272,477	651,486	620,991
低　位　推　計			
1982	1,003,915	515,277	488,637
1987	1,062,108	545,117	516,991
1992	1,122,860	575,907	546,953
1997	1,178,154	604,160	573,994
2002	1,220,458	624,279	596,179

（資料）　第5表，第6表および第7表より。

推計人口の3区分別年齢構造係数を示したものである。0—14歳階級の若年人口は高位推計で1992年までその割合を28%前後まで低下させるが，それ以降増大し，2002年には30%前後まで上昇する。中位推計および低位推計ではこの人口の割合は持続して低下し，2002年には20—24%水準に落着き生産年齢人口の増大につながる。

一方老齢人口の割合は各推計において上昇することが予想されるが，高位推計では2002年に20—24歳階級に男女とも内側にくぼみをもちふたたび＜富士山型＞の基本構造に戻る気配が認められ，中位推計では20—24歳以下で＜つりがね型＞の構造が形成され，そして低位推計では＜つぼ型＞の構造が認められる。中位推計および低位推計のいずれにしたがおうとも，2002年の中国人口は老齢人口の比重を大きすることが予想される。このことは，従属負担係数を高め，早晩高齢化社会に直面することを意味するものである。いまの中国の人口政策が変わりなく引き続き強力に進められるかぎり，将来の中国人口は高位推計の姿よりは中位推計あるいは低位推計人口の形をとることが考えられるのである。

第9表　中国将来推計人口の区分別年齢構造係数の推移

（単位：%）

年齢階級	1982年	1987年	1992年	1997年	2002年
男			子		
高位推計					
総　　数	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
0 — 14歳	33.74	92.13	28.32	29.73	30.11
15 — 64	62.02	66.20	66.53	64.59	63.63
65＋	4.24	4.67	5.15	5.68	6.26
中位推計					
総　　数	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
0 — 14歳	33.74	28.40	26.14	25.49	24.20
15 — 64	62.02	66.88	68.55	68.49	68.93
65＋	4.24	4,72	5.31	6.02	6.87
低位推計					
総　　数	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
0 — 14歳	33.74	28.04	24.98	23.24	21.19
15 — 64	62.02	67.22	69.63	70.35	71.49
65＋	4.24	4.74	5.39	6.41	7.32
女			子		
高位推計					
総　　数	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
0 — 14歳	33.44	28.77	27.96	29.37	29.88
15 — 64	60.95	65.53	66.04	64.25	63.24
65＋	5.61	5.70	6.00	6.38	6.88
中位推計					
総　　数	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
0 — 14歳	33.44	28.18	52.85	25.18	23.85
15 — 64	60.95	66.07	67.97	68.06	68.61
56＋	5.61	5.75	6.18	6.76	7.54
低位推計					
総　　数	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
0 — 14歳	33.44	27.81	24.75	23.09	20.97
15 — 64	60.95	66.41	68.98	69.96	71.03
65＋	5.61	5.78	6.27	5.96	8.00

（資料）第5表，第6表および第7表より。

参 考 文 献

〔1〕 Coale, A. J., *Rapid Population Change in China, 1952—1982,* National Academy Press, Washinton, D. C., 1984.

〔2〕 Coale, A. J. and P. Demeny, *Regional Model Life Tables and Statable Population,* Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1966.

〔3〕 石 南国,「中国人口の基本構造」南 亮三郎編,『中国の人口増加と経済発展』アジア経済研究所, 1970年2月, 55—93ページ。

〔4〕 国家統計局,「関於全国人口調査登記結果的公報」『偉大的十年』 1959年。

〔5〕 国家統計局編,『中国統計年鑑』中国統計出版社, 1984年。

〔6〕 国家統計局編,『中国統計年鑑』中国統計出版社, 1985年。

〔7〕 国務院人口普査弁公室・国家統計局人口統計司編,『中国1982年人口普査10%抽祥資料』1983年11月。

〔8〕 国務院人口普査弁公室・国家統計局人口統計司編,『中国1982年人口普査資料』中国統計出版社, 1985年7月。

〔9〕 Liu Zheng, Song Jian and Others, *China's Population : Problems & Prospects,* New World Press, Beijing, China 1981.

〔10〕 日本貿易振興会編,『米国のみた中国経済—米国上下両院合同委員会報告—』, 日本貿易振興会, 1972年。

〔11〕 鄔沧萍,「中国人口年齢結构的特典」『人口研究』1984年第4期, 1984年7月, 1—6頁。

〔12〕 楊徳清主編,『人口学概論』河北人民出版社, 1983年。